

初級におけるディベート準備授業の試み

永井 涼子

要 旨

日本語の総合的な教室活動の一つにディベートがある。ディベートは口頭表現能力だけでなく、聴解能力、思考力、情報収集・分析力などを伸ばす活動として主に中上級レベルのクラスで実施されてきた。しかし、ディベートで使われる表現は日常生活でも使え、さらにはディベートに向けた授業を通して正確な伝達および聞き取りと日本語のコミュニケーションに必要な能力を育成できる。以上の点からより早い段階からの実施が必要だと考えられる。つまり初級からディベートに向けた授業を行うことで、既習の知識を駆使しながら意思疎通を行うことを経験できると考えられる。本稿では、これまで中上級レベルで行われてきたディベートを初級レベルで行うため、その準備授業をコースの一貫として組み込んだ試みを報告する。そして、初級レベルではどのようなディベートのための準備授業が可能であるか、ディベート準備授業を日常の日本語クラスの中でどのように位置づけるのかを考察する。さらにディベート準備授業を行うにあたり、日本人ボランティアから協力を得たが、日本人ボランティアが教室内でどのような役割を担っていたかについても報告する。

【キーワード】 ディベート 初級レベル 準備授業 日本人ボランティア

Preparatory Debate Classes for a Basic-level Japanese Course

NAGAI Ryoko

【Abstract】 The purpose of this paper is to present the outcome of an experiment conducted in a basic-level Japanese oral class where debates were held. Most debate classes in Japanese language education are conducted as part of the intermediate or upper level courses. However, we need to reconsider holding debate classes for basic-level courses. The main reasons for this are that expressions used during debates are also useful in daily life, and that it is important for Japanese learners to learn communicative competence and listening comprehension correctly. Through this report, I propose that it is practically possible to hold debates for basic-level courses. In addition, the paper also illustrates an experiment where Japanese volunteers were invited to observe and assist the classes.

【Keywords】 debate, preparation for debate, Japanese volunteers

1. はじめに

ディベートは、口頭表現の技術向上だけでなく、聞き取り能力や思考力、情報収集力、分析力など総合的な学習が可能な教室活動のひとつである(野山ほか1997)。日本語教育の場においては、特に中上級レベルの口頭表現技術の向上を目指して取り入れられていることが多い(東海大学学生教育センター口頭発表教材研究会1995、明治書院1995、館岡ほか2003)。確かにディベートは客観的資料などをもとに相手を説得するような論を展開するだけでなく、相手の論旨を正確に把握し的確な反駁を行う必要もあるため、中上級クラスで実施するのに相応しい教室活動と言えよう。

しかし、ディベートはそれ相応の準備を行えば初級レベルでも十分可能な活動であると考えられる。近年は学生の増加に伴い、初級レベルの学生も増えつつある。つまり、初級の学生でも研究室でのやりとりなど日本語によるコミュニケーションの機会が多くなりつつある。そこで初級レベルにおいても情報伝達を主眼とする多角的な口頭表現の授業の必要性が考えられる。本稿では、そのような初級授業の一環として、ディベート実施のために行われた口頭表現の授業「日本語で話そう」クラスの報告を行う。

ディベートは「日常生活の場面や通常の話し合いでは演習しにくい要素を多く含んでいる」(野山ほか1997)とされるが、大学および大学院における研究生活には役立つ表現も多く、初級レベルの項目を駆使することで基本的には遂行できる活動でもある。また、今まで学習した項目を工夫して意思疎通を図ることは初級段階から訓練すべきことであり、日本で学ぶ学生にとって重要なストラテジーであると考えられる。本稿では、「言いたいことを相手に伝え、相手の発話を正しく理解する」という目的のもとで行ったディベートの準備授業の試みを報告する。さらにディベートの準備授業が持つ、単なるディベートのための授業としてだけでなく、初級コースの一環として組み込める口頭表現の授業としての可能性を探る。

またこの準備授業においては毎回日本人ボランティアに参加してもらい、教室活動の手助けをしてもらった。そこから、ディベートの準備授業および初級レベルの授業に日本人ボランティアが参加する意義および日本人ボランティアの役割についても考察を行いたい。

2. ディベートとは

ディベートとは、「あるテーマについて無作為に肯定側と否定側に分かれ、同じ時間で立論・尋問・反駁を行い、ジャッジが勝ち負けを宣する討論」(新村1998)、「一つの論題に対して、対立する立場をとる話し手に、聞き手を論理的に説得することを目的として議論を展開するコミュニケーションの形態」(松本2001)とされている。自由討論とされるディスカッションとの違いとして、賛成・反対という2つの立場に分かれ議論を行う点が

挙げられる。

本稿ではディベートを「あるテーマについて肯定側・否定側に分かれ、聞き手に配慮しながらも説得することを目的として展開される議論」と定義する。つまり、ディベートとはいえ、勝ち負けにこだわり徹底的に相手を攻撃したり強く主張したりするものではなく、相手との関係調整を行いながら意見を主張するものと位置づける。

3. 授業概要

3.1 クラス概要

ディベートの準備授業「日本語で話そう」クラスが行われたのは、筑波大学の学類および大学院所属の留学生を対象とした筑波大学留学生センターの補講クラスで、初級後半レベルの「J400」である。2008年度は毎日75分の授業を1コマで、週5コマ10週間のコースが2クラス（J400 - 1、J400 - 2）で行われた。授業は3～4名の教師によるチームティーチングで進められた。使用テキストは『Situational Functional Japanese』（以下『SFJ』と略す）vol.3である。授業はテキストに沿って行われていたが、進度の妨げにならない箇所ではディベートの準備授業である「日本語で話そう」クラスが行われた（資料）。この「日本語で話そう」クラスは全6回実施された。

「日本語で話そう」クラスは、①学生が自分たちの知っているレベルで文法や語彙を工夫しながら意思疎通をすること、②学期末の2日間に行われるディベートが日本語で滞りなくできるようになること、の2つを目的として設けられたクラスである。つまり、学期末に行われるディベートのための準備授業ではあるが、単にディベートをするための授業というわけではなく、その授業を通してコミュニケーション能力の向上も図るものである。

本稿では2008年度に初めて実施された試みを報告する。2008年度の受講者はJ400 - 1、J400 - 2クラスで合計26名であった。

3.2 授業で取り上げた内容

ディベートのための準備として学習する表現には様々なものが考えられるが、今回の試みでは以下のような文末表現を中心とした内容を取り上げた。

第1回目： オリエンテーション

意見を言う： ～と思います／～じゃないでしょうか／～じゃないかと思っています

第2回目： 理由を伝える： ～ので、～から

第3回目： 賛成意見を言う： そうですね／（私も）そう思います／Aさんに賛成です／その通りだと思います／いい考えだと思います

反対意見を言う：　そうですね、ですが～／... もいいですけど、～／なるほど。ですが～／確かに... ですが、～

第4回目：　相手発話そのものを理解するために質問する：　すみません。ちょっと聞き取れなかったんですが、... ですか？／もう一度言っていただけませんか？

相手の発話内容を理解するために質問する：　すみません... って何ですか？／... はどういう意味ですか？／例えばどういうことですか？

自分の理解を確認する：　～ですね？

第5回目：　相手の発話内容について質問する

第6回目：　司会者を入れた3名でのミニディベート（『SFJ』24課の Conversation drill を利用）

授業は積み上げ式とし、毎回「日本語で話そう」クラスに参加するごとにやりとりの回数が増えていくようにした。そうすることで、前回の授業内容も復習しながら授業が進められるからである。

授業内容は、使用テキスト（『SFJ』）の中で取り上げられているものを中心とし、通常の『SFJ』を使った授業と大きく食い違うことがないように努めた。また、留学生が行うディベートの大きな特徴のひとつとして、対人関係調整に関わるメタ言語の種類および使用数の少なさが挙げられる（大塚 2002）ことから、質問や反論など相手の発話に対する発言を導入する際には「そうですね」「すみません。ちょっと聞き取れなかったんですが」など相手との対人関係を調整するようなメタ言語表現も取り入れるようにした。このような対人関係を配慮した表現は、ディベートだけでなく日常生活においても必要不可欠なものであり、初級段階からその使用が求められるものであるといえよう。

3.3 授業方法

授業の進め方は以下の通りである。まず教師によって、前回までの復習および新しい項目の導入が行われる。この導入の際は、できるだけ前回と同じテーマを用い、前回の授業項目とのつながりを意識した中で学習がすすめられるように図った。導入の後、新しい学習項目を使った短文作成を口頭で行い、練習を行う。短文が作成できるようになったら、教師が作成したプリントをもとにモデル会話を使った練習が行われる。前回までの学習項目を取り入れたモデル会話のプリントを見ながら、やりとりの流れを理解したのちに、モデル会話のリピート練習を行う。そして、学生同士あるいは日本人ボランティアとのペアで、与えられたトピックについて練習を行う。最後にペアごとに発表を行い、教師がフィードバックを与える。

また、相手発話に対する質問を行う第4回目・第5回目では、発話理解および質問の動機付けのために相手発話の内容についてメモをとる練習も同時に行った。言葉をきちんと聞き取ることが重要視された第4回目では日本語で、内容理解が重要視された第5回目では母語でもいいので、メモをとるように指示した。

4. 観察および考察

この試みの結果として、評価できる点、改善すべき点双方が考えられる。以下でそれぞれを報告すると同時に、改善すべき点についてはどのような改善の方法が考えられるのか、今後の課題として考察したい。

4.1 評価できる点

評価できる点としては、①学生の動機付け、②授業到達度の意識および③語用論的特徴の学習の3点が挙げられる。

4.1.1 学生の動機付け

今回の試みの成果として、まず学生の日本語学習に対する動機を高められたことが挙げられる。「言いたいけれど言えない」「きちんと言っているのに伝わらない」ということを授業中に経験し、そのためにはどのように伝えればいいのかをその場で学習することができたからではないだろうか。

具体的に挙げると、「今自分が言いたいことを伝えるためにはどうすればいいのか」ということを学生自身が真剣に考えるようになった。学生の中には単語だけ並べて文末まで言うことなく、相手に察してもらうことでコミュニケーションをとっている者も多い。しかし、今回は文末表現を中心に学習したこともあって、文末まできちんと述べなければ相手に真意が伝わりにくいということを学ぶことができたと考えられる。また作られた状況下ではあるが、必ず相手に自分の考えを伝えなければならないというコミュニケーションの必要性に迫られることで、より正確な伝達を心がけるようになったと考えられる。

また、相手の発話内容をメモする活動から、学生自身が思っている自己の能力評価と実際の聞き取り能力との違いを感じ、より真剣に聞き取ろうとする姿勢も生まれた。これまで自分では聞き取れていて内容もわかっていると思っていたが、実際にメモをとろうとすると書けないという経験をすることで、より相手の発話を丁寧かつ正確に聞こうという姿勢がみられた。

最後に、コミュニケーション能力とは関係がないが、この授業が通常の教科書を使った授業ではなく、教師が作成したプリントをもとに授業を進めたため、学習態度の向上もある程度観察された。教科書にはない項目を導入することもあったので、学生は真剣に教師

の言うことに耳を傾け、多くの学生がノートをとっていた。

4.1.2 授業到達度の意識

この授業は毎回少しずつ表現を積み重ねることで、長いやりとりができるように計画したため、学生にも授業到達度を意識することができた。また、積み上げ方式であるので、前回の復習も兼ねて授業を行うことができ、学生もこれまでの自分の学習の経緯を意識しながら授業に参加することができたと考えられる。

4.1.3 語用論的特徴の学習

今回は、学生の使用傾向が少ないとされる対人関係調整のメタ言語表現も取り上げたことで、通常の授業ではあまり時間を割くことができない語用論的特徴についても学習することができた。初級では学習項目の定着に焦点が当てられがちであるが、初級の学生でも研究室に所属し、研究室のメンバーと日本語でやりとりする場面も少なくない。その際、このような語用論的特徴の習得が相手に与える印象を左右するといえるのではないだろうか。文法の誤りは「初級だから」と理解されるだろうが、語用論的特徴の欠如や誤りは「失礼な人」と誤解されやすい。今回の学習を通してディベートだけでなく、日常のやりとりにも応用可能な語用論的特徴も学習できたことは成果のひとつと考えられる。

4.2 改善すべき点

今回は初めての試みであったため、授業の進め方だけでなく、ディベートや通常授業との連携などにも多くの課題が残った。ここでは課題の指摘を行うと同時に、改善策を模索することとする。

4.2.1 授業の進め方

まず、積み上げ方式の授業の弊害として、前半の授業におけるやりとりの量の不足が挙げられる。つまり、初回では「意見を言う」だけなので、会話も簡単に終わってしまうのである。もちろん、次回につなげられるような、質問をしたい、反論したいという動機づけを与えることはできる。しかし、実際にその行為が遂行できるようになるまでには時間がかかるため、学生が学習した表現と実際に使える会話のつながりを見出すことが難しい。

そこで「日本語で話そう」クラスでは、ディベートとの関連だけにこだわらず、様々な文脈での練習を与えるなど、やりとりの量を増やす工夫が必要であったと考えられる。この授業では日常生活でも使える口頭表現の学習を目的としているため、今回学習した表現は実際のどの場面では使えるのかを考えさせ、練習してもよかったのではないだろうか。

あるいは、ターンが少なくなってしまう前半の授業では、ペア練習にするのではなく、

クラス全体あるいはグループで、司会者（教師あるいは日本人ボランティア）を置いて単に意見を出し合い、聞く練習をするという方法もあるだろう。その際、出てきた意見を二つのグループにわけ、実際のディベートではこのように二つのグループに分かれて議論を行うなどオリエンテーションの一部として利用することもできる。

次は学生に書かせたメモである。これは、学生によっては書くことに非常に時間をかけてしまったり、どうせ先生は見ないだろうということで手抜きをする学生もいたりするなど、学生によって取り組みに差があった。もしメモをとる習慣をつけさせるのであれば、メモを取る必要性を丁寧に説明すると同時に、情報の取捨選択などメモの書き方も詳しく指導するべきだった。特に日本語でメモを書く必要があるのかどうかについては考える必要がある。

また、発音の指導不足もある。今回は内容や文法的正確さに重点を置いたため、発音指導ができなかった。しかし実際には同音異義語の問題などから、発音は非常に大切であるので、指導の必要があった。その解決策としては、前年度の学生のディベートを見せて発音を意識させる、聞き取りにくい発話を聞かせて注意を促すなどの方法が考えられる。それにより学生自身が発音の必要性を感じることができれば、短期間での学習が期待できる。

4.2.2 通常授業との連携

ディベート準備の授業が通常授業の進度などの関係で不規則になってしまったため、学生にあまり準備を求められなかった。例えば、課題を与えたり、事前にテーマについて調べたりすることなどができなかった。しかし、これはディベートの準備授業をJ400の通常授業とは全くの別物と考えていたからである。通常授業でその日に学習した項目を使って意見を述べ会話練習とするなど、通常授業の一環として組み込める方法はあっただろう。この方法をとることにより、仮定などの既習項目を意見の主張に有効な戦略として練習することができるだけでなく、課題を通常授業とのつながりを保ちつつ、学生に要求することができるのではないだろうか。

4.2.3 ディベートとのつながり

「日本語で話そう」クラスはディベートの準備授業であったが、学生個人の練習時間を考慮し、授業自体は基本的にペア練習としたため、グループでの討論という形にうまくつなげられなかったのではないかという懸念もある。ディベートはグループ対抗という特徴もあるが、今回の試みではそれを生かしきれなかった。

これに対しては、ある程度文型を積み上げた後は、ペア練習後に日本人ボランティアに入ってもらって3人のグループを作り、授業の最後にミニディベートをするというのではないだろうか。初級段階では司会を学生がするのは大きな負担となるため、日本人ボラン

ティアが司会となり毎回ミニディベートを経験することで、ディベートとのつながりが保てるのではないと思われる。あるいは、ペア練習後の発表をディベート形式にすることも考えられる。この場合は教師が司会となる。この方法だと自身の意見をより多くの人に聞いてもらえることにもなり、多くの人の前で意見を言う練習にもなる。

以上、今回の試みの評価できる点、改善すべき点について記述し、改善すべき点の解決策について考察を行った。以下では、今回の試みの大きな特徴の一つである日本人ボランティアの役割や意義についての考察を行う。

5. 日本人ボランティアの役割

今回の試みの大きな特徴の一つに、日本人ボランティアの参加がある。筑波大学および筑波学院大学の大学生を対象に募集をかけ、J400-1には6名、J400-2には4名のボランティアの協力を得ることができた。今回の授業に参加したボランティアは日本語教育専攻が2名、国際専攻6名、教育専攻1名であった。

彼らには会話練習の際にペアになってもらったり、ミニディベートの司会をしてもらったりするなど参加者として授業に加わってもらった。さらに、学生の語彙や表現理解の手助けをするなど学習援助者としても協力してもらった。実際に日本人が参加することで、学生は大いに刺激を受け、非常に工夫した例文を作るなど大きな利点を得られた。また、日本人ボランティアがいるため、学生は教師を含む日本人を相手に発話する機会が多くなり、さらに教師は問題が起こっている学生により多く対応することができた。学生は、日本人ボランティアと話すことにより意味交渉を行い、自らの理解をより意識的に認識することにつながるとされている(杉山 2001)。杉山(2001)は中級レベルの授業から上記の考察を得ているが、初級レベルでも同様のことがいえることが明らかになった。

しかし、ボランティアであるため出席が確実ではない、初級段階としては難しすぎる発話や語彙のため意図した練習までたどりつけない、意図した練習ではなく雑談に移行してしまうなど、いくつか課題も挙げられる。

6. おわりに

本稿では、初級レベルにおけるディベートの準備授業の試みについて報告を行った。この試みにより、これまで中上級レベルの教室活動とされてきたディベートが初級でも実施可能であること、またディベートのための授業が日常生活のコミュニケーション能力の向上につながることなどが示唆された。なぜ初級でディベートなのか、その必要性はどこにあるのかを問う声もあるだろう。しかし、相手に正しく意見を伝え相手の意見を深く理解しようとするディベートは、初級レベルから継続して実施する価値があると考えられる。

今回の授業は1学期間の数回の授業の事例報告であった。今後さらに様々な方法を検討

し、既習の初級文型を活用しながら自分の意見を伝えあう授業を模索していきたい。さらに、今回は教師側からのみの観察および考察であったため、今後は学生や日本人ボランティアにもアンケートをするなどして評価を求めることで多角的な考察を得ることができよう。また、初級レベルにおける日本人ボランティア参加の在り方について、どのようにすれば留学生・日本人ボランティア双方にとって有意義なものとなるのかを観察および考察していく必要がある。

謝辞

J400 の授業を一緒に担当してくださり、「日本語で話そう」クラスについて様々なご意見をいただいた西村よしみ先生、許明子先生、関裕子先生にお礼を申し上げます。また授業に協力していただいた日本人ボランティアの方にもこの場を借りてお礼を申し上げます。

参考文献

- 大塚容子（2002）「ディベートにおけるメタ言語表現：日本語学習者の場合」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編』第 41 号：57-67
- 杉山純子（2001）「日本人パートナーが参加した「応用会話 B」クラス：2000 年 10 月から 2001 年 2 月までの実践報告」『岐阜大学学生センター紀要』：93-106
- 館岡洋子・斉木ゆかり（2003）「ディベート授業の実践と意義：漢陽大学日本語研修講座におけるディベート」『東海大学紀要 学生教育センター』23 号：53-66
- 東海大学学生教育センター口頭発表教材研究会（1995）『日本語口頭発表と討論の技術』東海大学出版会
- 中川良雄（1994）「ディベートによる日本語授業の試み」『京都外国語大学 研究論叢』第 44 号：310-319
- 新村出編（1998）『広辞苑 第五版』岩波書店
- 野山広・八田直美・古川嘉子・文野峯子（1997）「非母語話者教師研修における「聴解・口答表現」授業の試みーディベート活動を通してー」『日本語国際センター紀要』第 7 号 国際交流基金日本語国際センター：69-87
- 松本茂（2001）『日本語ディベートの方法』七實出版
- 明治書院（1995）『日本語学 特集ディベート』14 6 月号 明治書院

資料

2008年度1学期 J400 (J400 - 1、J400 - 2) 授業進度表

週目	日時	授業内容
	04/18	『SFJ』 17 課
1 週目	04/21	『SFJ』 18 課
	04/22	『SFJ』 18 課
	04/23	『SFJ』 19 課
	04/24	『SFJ』 19 課
	04/25	『SFJ』 19 課
2 週目	04/28	『SFJ』 19 課
	04/29	昭和の日
	04/30	『SFJ』 19 課
	05/01	『SFJ』 20 課
	05/02	『SFJ』 20 課
3 週目	05/05	子どもの日
	05/06	振替休日
	05/07	『SFJ』 20 課
	05/08	『SFJ』 20 課
	05/09	『SFJ』 20 課
4 週目	05/12	Oral Presentation
	05/13	『SFJ』 21 課
	05/14	日本語で話そう
	05/15	『SFJ』 21 課
	05/16	『SFJ』 21 課
5 週目	05/19	Oral Presentation
	05/20	『SFJ』 21 課
	05/21	日本語で話そう
	05/22	『SFJ』 21 課
	05/23	中間試験
6 週目	05/26	『SFJ』 22 課
	05/27	『SFJ』 22 課
	05/28	『SFJ』 22 課
	05/29	『SFJ』 22 課
	05/30	日本語で話そう
7 週目	06/02	『SFJ』 23 課
	06/03	Oral Presentation
	06/04	『SFJ』 23 課
	06/05	『SFJ』 23 課
	06/06	『SFJ』 23 課
8 週目	06/09	『SFJ』 23 課
	06/10	Oral Test
	06/11	日本語で話そう
	06/12	『SFJ』 24 課
	06/13	『SFJ』 24 課

初級におけるディベート準備授業の試み

8 週目	06/09	『SFJ』 23 課
	06/10	Oral Test
	06/11	日本語で話そう
	06/12	『SFJ』 24 課
	06/13	『SFJ』 24 課
9 週目	06/16	『SFJ』 24 課
	06/17	『SFJ』 24 課
	06/18	『SFJ』 24 課、日本語で話そう
	06/19	日本語で話そう
	06/20	『SFJ』 24 課
10 週目	06/23	『SFJ』 総復習
	06/24	期末試験
	06/25	期末試験の解説
	06/26	最終ディベートの準備
	06/27	最終ディベートの準備
11 週目	06/30	最終ディベート
	07/01	最終ディベート